

大森 静佳 選
選者賞

葉牡丹

滋賀 深川 泳

ポタージュを縦に混ぜつつ母親に向いている人と言われる夜よ

せり上がる大根 ずっとどうやるか分からなかった後ろあやとび

むらさきの歯磨き粉で歯を磨くとき両親はだんだんとおくなる

ふくろこうじ・じゃじゃまるあなたを愛おしく思っつて咲かせつ

づける葉牡丹

花という生殖器官へたくそなうがいのように春はこぼれて

選評

「葉牡丹」は子ども時代や生殖ということへの疑問未満の思いを底に響かせ、世界に向かつて終始首をかしげる真顔のチャーミングさが光る。二物の衝突感や、一首目「縦に」などさりげなく巧み。四首目「じゃじゃまる」は昔NHKの人形劇に登場した威張りんぼうの山猫だが、苗字が「ふくろこうじ（袋小路）」だったとは切ない。こうした歌の奔放さも力。「九段舌」は皇居や靖国神社のある九段下をものじり、五首を「舌」や飲食にまつわるモチーフで統一。「王冠」から天皇制を連想させる三首目など、毒気のある挑発性が印象に残った。私たちの「舌」や言葉に忍びこむ不穏を描く。「結露」は一首目の未知の感覚にむずむずし、四首目の不思議な気分に興奮した。やや醒めた視点から自分だけの感覚を書こうとする作者。「顔のなかから」は一、四首目など主述や韻律に心地よい曖昧さがあり、きわめて独特な魅力を持つ文体。時間も身体も溶け、現実と夢が反転する。

「特選」

九段舌

東京 吉村 優作

東京のすべてのパフェにスプーンがよぎる皇居のような空洞
言葉狩りのこの滑らかな断面にサンドイッチで落とされた耳

瓶ビールに王冠ひとつ 戦前か戦後か口はわからないから

大将の手に濡れている軍艦は僕らの誰かが頼んだはずの

心臓をめがけて撃ったはずなのに ミントゼリー すごくきれいだ

顔のなかから

東京 中田 明子

ひとりになると部屋より広くなる身体、手のうえに顎載せてひらたい

水滴がやがてなずきとなってゆく猫から昼が滲みだしている

けぶかいものの輪郭のよくひかるあさあまりもののようにてのひら

ねむたさに肘ついてつぶるそとがわの少年合唱 顔のなかから

すこやかにねむる仔猫が歌にきて歌に猫、生前の顔する

「佳作」

結露

神奈川 黒川 かおる

独裁者、夕焼けの坂 そういえば「トイレに行く」と言い足りないな
ビーカーはあふれるための 愛するには愛することを愛さなくては
産むというあなたの孤独がわたしにはわかることなくドン・キホーテへ
幼さがポットに水を注ぎ出して布団に座っている朝がある
寂しさという特権を味わって街頭監視官を辞めたい

だれかの豊かさ

東京 吉澤 颯太

手の甲を砂漠としたら笑い飛ばすべきなのはオアシスがないこと
靴を売らないで だれかの豊かさをわたしも豊かさと思うだろう
ほほえみながら耳鼻科を出たら飛びかたを忘れた鳥にたとえられたの
罪だけどアサガオの蔓まきあげる力があなたにもあればいい
海から顔を出して伝えるデッサン用人形にさせたポーズのことを

泡と水中

東京 遊鳥 泰隆

目覚ましが鳴る前に目が覚めたけど目覚まし鳴らす 恋をしている
水中に潜ってひとり響かせた「好きだ」は泡と水中になる
ブラックを飲んで体をあたためるブラックは飲めるしあたたかい
あの日着た服が着られて身長が止まる仕組みでほんと良かった
ラブホから持って帰ったライターで朝、ばあちゃんの線香を焚く

佐伯 裕子 選
選者賞

風葬

愛知 遠藤 雄介

この星の成れの果てなる砂を踏みホソゴル砂丘にひとり立ちたり

車窓から見えるすべての白色はかつて大地を駆けていた骨

風葬の痕の残れる荒原に蒼穹あおぞらひろくひろく開はだかる

馬頭琴の音ねが駆け抜ける幸福を「天馬ヒモリ」と呼ぶ草原のうえ

ついさつき買ったばかりの馬でゆく遙かなる遙かなるモンゴル

選評

選者賞の「風葬」は、旅行詠として優れていると思われた。モンゴルの砂丘に分け入る旅。車窓に見える白色は、大地を駆けた動物のなれの果ての骨粉なのだ。乾いて清潔になった動物が、生き生きと砂漠に甦ってくる。また土地の言葉「ヒモリ」の響きが素晴らしい。旅の歌が旅を超えて、人間の幸福とは何かを突き付けてくるのである。特選の「冬の息」は、フルートを扱う指、唇の繊細な感覚がよく描かれていた。フルートに光を差しこむ指の美しさ。楽器を扱う人の相聞歌として、触れないでいる愛が繊細に伝わってくる。特選の「グランド・ゼロ」は、貿易センタービル襲撃を芯に、人間と信仰を捉えた一連。人の数だけ教会がある、という。信仰の難しさをひたすら問いかける。世界に眼を向ける視線が生きているだろう。岡井隆は、社会の動静をも、巧みな修辞で精力的に詩歌に取り入れていった。今回の選考で、優れた作品たちに出会えたことを嬉しく思っている。

「特選」

冬の息

宮城 鈴木 そよか

フルートは一本の闇を抱く器官 運指のたびにひかりは差して
数学と音楽の近くあった日を遠き大河のように眺める
雪の降る音は雨より軽きゆえ君は見上げる喉を晒して
吸うときは果てなきものを想起する風に揉まれる君の耳など
天球の音階を成す冬の息ひかりつつわが肺を湧き出よ

グラウンド・ゼロ

栃木 斎藤君

Kalosは子を燃やす神 鶏頭は思考のたびに脳にさざめく

人の数だけ教会はあるというガムひとつない夜の十字路

Quarta! (殺す!) 正しい風は吹き去ってそれからずっと椅子が冷たい

飛行機と静かな九月 祈るとき脊椎はみな曲線となる

欲しいのは秋の大きな柔らかな砂漠に硝子を探すとしても

「佳作」

つれてゆくのは

東京 中田 明子

わたりゆくこえをまず追い鳥になる目は薄明をふくらんでいる
啜えきれない野薔薇の実をまた落としわたしは秋の動詞おぼえる
いくひやくの輪を描き来し水鳥をねむりゆく寝台がひろげて
目のなかに鳥うつしつうつろいに脚をそろえる猫、砂、さらさら
木の子なる小鳥ともないゆうぐれの年輪は胸のほうからひろがる

早番の朝

京都 神守 彩枝

教室を奥から順に開けてゆき風を置きたり早番の朝
ギイイイと眠たげに鳴く右の戸にもう何度目かの油を差しぬ
両親のいる子いない子そんなこと知らぬ子の椅子みな前を向く
黒板の日付は今日に 君たちのいちばん遠くへ語りかけたい
金色が窓からほんの少しずつ増して教室は教室になる

僕のいる街

神奈川 玄田 生

恋人を撮る人がいてその前を通る優しい恐竜がいる

深海に虹の身をした貝がいてまだその色を知らないでいる

道端にネジが一本落ちていて交番に泣くロボットがいる

神様に大勢並ぶ人がいて羽を隠した天使も並ぶ

恐竜も貝も天使もロボットも確かに住まう僕のいる街

● 笹 公人選 選者賞

五瞬

大阪 富岡 正太郎

たちこめる別離の予感おそれつつ黙に寄り添う春の幾年

折れば折るほどに小さくなる紙をまだ折れないか夕食の後

口のなか苦くして思う意味よりも言葉選びが好きだったのか

「たまに会って話し相手になってほしい」「とても嬉しいけれど
できない」

一瞬というには長く五瞬かな君が涙に崩れるまでを

選評

「五瞬」は、まず造語による題名の鋭さに惹かれた。白眉は二首目。

「折れば折るほどに小さくなる紙をまだ折れないか夕食の後」

折り紙のイメージを通して、別離の予感や、言葉を選びきれない逡巡が繊細に表現されている。

日常の具体から関係の本質へと思考を深めていく手つきには、どこか岡井隆を思わせるものがあり、さらにその人生を象徴する問題に真正面から触れている点にも、選者賞に推すに足る強い必然を感じた。

特選「まつすぐの」は、ラムネや花火といった感覚的なモチーフを通して、身体の奥にひそむ恋の震えを瑞々しく描き出し、比喩の透明度が際立つ。優れた相聞歌であると同時に鮮烈な青春短歌でもある。

「わからないまま」は、都市の風景と内面の揺らぎとを重ね合わせ、言葉にできない思いをあえて抱え続ける強さを示している。

いずれの連作からも、言葉の届かない場所にまで手を伸ばそうとする歌人としての誠実な眼差しを感じた。

「特選」

まつすぐの

栃木 小池 千秋

かろかろとまわるビー玉あのひとの舌の裏までラムネながれて

あのひとの指の股からぬけてくる夜風わたしのものにならない

しらしらとこぼれる花火あのひとの呼吸に触れた気がしてすくむ

短冊をひるがえしひるがえし風鈴は腫れた心臓

こめかみをゆっくりつたい落ちていくおのおの汗まつすぐの汗

わからないまま

東京 夏山 葉

ひとが死ぬ映画のあとにゆく渋谷、世界一あかるい谷の底

わからない台詞をわからないままにつぶやいてみる 好きだと思っ

尋ねればありふれた比喩であることをきみは正しくおしえてくれる

ハルシネーション そのうつくしい横顔でいつか反乱起こしてほしい

マフラーに口をうずめて好きだった台詞をもう一度つぶやいた

「佳作」

そのときのために

茨城 他人が見た夢の話

遠い日のゲームセンター MAXまでゲージを貯めて打つアリュープ

集まればまだこれほどに人は居て商店街の抽選会場

やり過ぎすことに全振りしたときの課長の強さ何に例えよう

ゼットン¹の鳴き声まんま「ゼットン」で気付いてからはそれ待ちだった

どっちみち先は読めない盤面でとりあえず寝るに一点賭けを

智歯

東京 森崎 とわ

かぶに塩 やつこくなるまで五分ほど葉っぱをささむ如月の夜に

一緒にはもう暮らしたくないんです頑固で黄ばんだ親知らず抜く

最期だとわかってしまう最後あり母の歯茎のメタモルフオーゼ

指で持つ線香花火の影ありてMIRのジャンルはテクノ

母なのに母だからこそ母のくせにけっこうジャリツとアサリの砂は

夕焼けダンス

東京 野田 鮎子

語尾を上げ舌まだるこく話す人かわいいは消費だと気づいて

かわいいは自我をもつことそう言えばやつかみそんな神などいない

問うこともハラスメントになりますか言葉を選び底に隠した

鍵がない？みんなで探すものでしょう犯人探しながらしないで

足を止め撮ったのだろう鮮やかな年金手帳色の夕焼け

心を呼びて

福井 西 爽子

風船に天の高さを見届くるはずが小さくとり残されぬ

階下から高く鳴り鳴る洗濯機また過去にゐる心を呼びて

まなうらに眠る羊を人間の姿に戻す真夜の編みもの

雨風を砕くやうなる鐘の音は幻聴ならんされど聞き入る

昨日より一日を死期に近づけば「食べよ」とラフランスの香れり

選評

今回の応募作には、社会性や言語遊戯性を感じる作品が多く含まれていた。岡井隆の作風を意識した結果だろう。実験的なアプローチにも魅力を感じた。「心を呼びて」においては、その深い孤独感に注目した。現実に安らかに留まることができず、〈今ここ〉から遊離してゆく意識の動きが、もう一つの世界を引き寄せているようだ。「雨風を砕くやうなる鐘の音は幻聴ならんされど聞き入る」「昨日より一日を死期に近づけば「食べよ」とラフランスの香れり」などに、現実よりも生々しい別世界の感触があった。「まどろみ」に描かれた「父」、「母」、そして「猫」もよかった。家族という不思議な磁場の味わい。「お父さん、私は瑛子 水晶の輝き持てとあなたが付けた」という呼びかけの文体に鮮烈な響きがあった。「白馬のような」では「いない人のコートを掛けておくことは不潔だろうか」という問いの潔癖さが印象的だった。「夢」の「花梨」の存在感「教えてくれた」人への思いが支えているのだろう。

〔特選〕

まどろみ

宮崎 兒玉 瑛子

ゆるやかに崩れる記憶の地層にも星の砂あり掬えば光る

お父さん、私は瑛子 水晶の輝き持てとあなたが付けた

勇敢な夢をみたのか乳牛に助けられたと微睡のなか

「顔上げてきれいな妻の顔を見て」母が笑えば父もつられて

波のある時に寄り添う老猫は伸び一つして寝返りをする

白馬のような

東京 湯島 はじめ

天国の食餌のように真白くて直方体のホームランバー

冷凍庫の霜を削っている夜のふいに匂うな不登校つて

いない人のコートを掛けておくことは不潔だろうか雨の卯月に

夢になお嵐のあとに割れていた実を花梨だと教えてくれた

朝日から最も遠いひとでした生まれ変われば白馬のような

〔佳作〕

つれてゆくのは

東京 中田 明子

わたりゆくこえをまず追い鳥になる目は薄明をふくらんでいる

啜えきれない野薔薇の実をまた落としわたしは秋の動詞おぼえる

いくひゃくの輪を描き来し水鳥をねむりゆく寝台がひろげて

目のなかに鳥うつしつうつろいに脚をそろえる猫、砂、さらさら

木の子なる小鳥ともないゆうぐれの年輪は胸のほうからひろがる

でいどりいみん

福岡 亀田 巧

そばつゆを吸いすぎているかき揚げにかぶりついたら工業地帯

もう醤油ペロペロさえも懐かしい西日がぬいぐるみに射し込む

満腹になれば心を猫にして死んだふりしてでいどりいみん

油っこい部屋の空気と入れ替わる外気との境目が眠たい

目尻から透明列車が遠ざかる ここで暮らしができてよかった